



和泉野

令和8年9月30日

<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/izumino/>

校長 船木 淳

「おーい、〇〇！ 待って！」

交差点の向こうにいる友達に声をかけ、手を振る小学生。声をかけられた子は、笑顔で手を振り返し、信号が変わるのを待っています。信号が青になると同時に速足で横断歩道を渡り合流した子どもたちは、少しじゃれ合いながら一緒に歩き始めました。お気に入りのSNSのことなのか、昨日やったゲームのことなのか、歩きながら話す内容は毎日変わるのでしょうか。小さくなっていく背中からは、これから始まる一日への希望が感じられます。

そんな中、登校時刻に間に合いそうにない子もいます。時間を気にしながらもとぼとぼ歩く後ろ姿に、さりげなく中学生が寄り添いました。知り合いなのか、肩に手をまわし、隣を歩きながら声をかけ、自分は中学校へ向かう道へ曲がっていきます。一人になってしまったその子の足取りは、ほんの少し力強くなったように見えました。

朝8時、松陽高校前交差点。いつもの、いずみ野小学校の、始まりの風景です。

毎日当たり前のように繰り返されているこの景色は、3年目を迎えた新生いずみ野小学校の象徴だと感じています。三家方面から来る児童と阿久和方面から来る児童が交わり、それを地域の方が見守っている。物理的にも精神的にも、始まりの場所。統合がなければ、この景色が見られることはなかったでしょう。子どもたちのやり取りを、毎日欠かさず温かい目で受け止め、安全に登校できるように支援していただいている MSI・学縁隊の方の存在は、学校にとって大きな財産です。学校としての困り感や子どもたちの思い（さらには私たち教職員の思い）に寄り添い、日々安心できる環境と子どもたちの自己実現への土壌を肅々と醸成していただけていることで、私たちも本来やるべきことに注力できます。本当にありがとうございます。

これは学校運営協議会や地域コーディネーター会議でもお伝えしているものですが、新設校がその学校の存在意識、自己定義、いわゆるアイデンティティのようなものを確立するまでには、最低でも5年、長ければ10年かかるということを経験上実感しています。

閉校・統合・開校という大事業（これは、想像以上にエネルギーを使います）の中にあった本校も、その混乱の中からようやく自分らしさを追究しようとする新しいフェーズに入りつつある。旧阿久和小の伝統と旧いずみ野小の伝統、保護者や地域の願いを土台に、さらには変化の加速する社会の流れの中で、「新生いずみ野小として主体性をもち、明確な意図をもって学習活動を探るフェーズ」です。そのスタート地点は、自己実現に向けた、子どもたちの実態と子どもたちの思い。決められたことに取り組む。言われたことをやる。そうではなく、自分は何をしたいのか、どうしたいのか、その根源にアプローチする必要があります。

折しも8月末には文部科学省から2030年施行の新学習指導要領の素案が提示されました。そこには多様な子どもたちの「深い学び」を確かなものにするための方向性として、①「主体的・対話的で深い学び」の実装 ②多様性の包摂 ③実現可能性の確保 の3つが示されています。これは、「新生いずみ野小として主体性をもち、明確な意図をもって学習活動を探るフェーズ」と一致するところがたくさんあります。子どもたちの思いを実現するために、教職員一人一人が目前の子に真摯に向き合うこと。極論すれば私たちにできることはそれしかないのかもしれませんが。当たり前ではないことを当たり前のように毎日続けていただいている学縁隊のみなさんのように、小さなことを着実に積み重ねていく。このことを意識していきたいと考えています。

その先に、そう遠くない未来に、登校時の会話の中心が、SNSやゲームからその日の学習活動に昇華することを願って。